上田市文化財調査報告書第97集

林之郷遺跡群

主要地方道小諸上田線国補道路改良事業に伴う林之郷遺跡群発掘調査報告書

2004. 3

長野県上田建設事務所

上　　田　　市

上田市教育委員会

上田市文化財調査報告書第97集

林之郷遺跡群

主要地方道小諸上田線国補道路改良事業に伴う林之郷遺跡群発掘調査報告書

2004. 3

長野県上田建設事務所

上　田　市

上田市教育委員会

例　言

1　本書は、長野県上田市大字蒼久保字中村に所在する林之郷遺跡群の発掘調査報告書である。

2　調査は、主要地方道小諸上田線国補道路改良事業（上田市梅ヶ丘～町吉田間）に先立ち、長野県上田建設事務所の委託により、上田市が受託して実施した。調査及び調査に係る事務は、上田市教育委員会事務局生涯学習課が行った。

3　現地調査は、2003（平成15）年5月8日から6月30日にかけて実施し、整理・報告書作成作業は、2004年（平成16）年3月までの間に断続的に実施した。

4　基準・水準点設置、メッシュ（グリッド）設置に係る各種測量、空中写真測量及び空中写真撮影は、株式会　社こうそく東信営業所（以下「こうそく」という。）に委託して実施した。また、遺構実測作業は、山本万里が行ったものを基礎に、一部こうそくが行った。

5　整理・報告書作成作業は、饗場奈那枝、井沢光子、石合好江、市村みつ子、大井敬子、田村まり子、田村雄二、　丸田由紀子、山本万里が行った。

6　本書に使用した写真は、主に中沢徳士が撮影し、航空写真はこうそくが撮影したものを使用した。

7　本書の執筆は中沢が行った。

8　本調査に係る資料はすべて上田市教育委員会の責任下に、上田市立信濃国分寺資料館に保管している。

9　本調査にあたり、多くの方々の御協力をいただいた。ご芳名を期して感謝する。（順不同・敬称略）
豊殿地区自治会連合会、豊殿地区振興会、社団法人上田地域シルバー人材センター、佐野亥一、佐々木但夫、佐々木英夫、村上正治、笹川廣、古沢辰男、坂本二三吉、笹沢政一郎、田中ふじめ、直井宝、丸山袈裟人、木村義幸、竹鼻靖之

凡　例

遺構

1　遺構の略号は次のとおりで、続く番号は、本調査地内で任意に振ったものである。
竪穴住居址…SB－、土坑…SK－、ピット…P－、竪穴住居址のピット…p

2　実測図については、国家座標の北を頁の上とし、例外は方位を示した。

3　縮尺は、原則として原図1/10と1/20に1/3縮小をかけて1/30、1/60とした。

4　レベルの標記はすべて海抜高（単位：m）である。

5　網点は焼土を示す。

6　遺構観察表の長さの単位はmで、主軸方位は国家座標の北からの角度で示した。また、竪穴住居址の壁高、土坑・ピットの深さは、検出面からの深さを示した。

7　土層の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色彩票監修の『新版標準土色帖』1990を用いて判別した。

8　遺構写真の縮尺は任意である。

遺物

1　実測図は、原図1/1に1/3縮小をかけて1/3とした。

2　遺物観察票の「胎」は胎土を、「焼」は焼成を、「色」は色調を示し、色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色彩票監修の『新版標準土色帖』1990を用いて判別した。法量の単位はすべてcmである。

3　写真の縮尺は任意である。

目　次

本文目次

例言・凡例
目次

第一章　調査の経過 …… 1
　第１節　調査に至る経過 …… 1
　第２節　調査の方法 …… 1
　第３節　調査日誌 …… 2
第二章　遺跡の環境 …… 3
　第１節　自然的環境 …… 3
　第２節　歴史的環境 …… 6
　第３節　遺跡の基本層序 …… 7
第三章　調査の結果 …… 9

写真図版 …… 21

報告書抄録 …… 24

図版目次

第１図　林之郷遺跡群周辺遺跡分布図 …… 4
第２図　調査区の基本層序 …… 7
第３図　調査位置図 …… 8
第４図　検出遺構分布図 …… 9
第５図　ＳＢ－０１遺構実測図 …… 10
第６図　ＳＢ－０２遺構実測図 …… 11
第７図　ＳＢ－０３遺構実測図 …… 12
第８図　ＳＢ－０４，０５遺構実測図 …… 13
第９図　ＳＴ－０１遺構実測図 …… 14
第10図　ＳＫ実測図 …… 15
第11図　ピット実測図（1） …… 15
第12図　ピット実測図（2） …… 16
第13図　出土遺物実測図（1） …… 18
第14図　出土遺物実測図（2） …… 19

表目次

第１表　林之郷遺跡群周辺遺跡一覧表 …… 5
第２表　ＳＢ－０１遺構観察表 …… 10
第３表　ＳＢ－０２遺構観察表 …… 11
第４表　ＳＢ－０３遺構観察表 …… 12
第５表　ＳＢ－０４遺構観察表 …… 13
第６表　ＳＢ－０５遺構観察表 …… 13
第７表　ＳＴ－０１遺構観察表 …… 14
第８表　ＳＫ，ピット遺構観察表 …… 17
第９表　出土遺物観察表 …… 20

第一章　調査の経過

第１節　調査に至る経過

平成 13 年 10 月 23 日、公共事業に係る埋蔵文化財の保護協議において、長野県上田建設事務所（以下「建設事務所」という。）から、主要地方道小諸上田線国補道路改良事業に伴う上田市梅ヶ丘～町吉田間の道路拡幅施工について協議があった。対象となる道路は、通称「祢津街道」と呼ばれるもので、施工予定区間は道幅が狭く、自動車のすれ違いが困難な箇所である。計画では、上田市の梅ヶ丘地区から町吉田間延長 300 mの現道幅 5 mを 10.5 mに拡幅するというもので、平成 14 年度事業として計画していた。

遺跡分布図によれば、予定地は林之郷遺跡群を横断しており、上田市教育委員会事務局生涯学習課文化財係（以下「事務局」という。）では、平成 14 年度国庫補助事業「市内遺跡発掘調査」により拡幅部分の試掘調査を実施した。

調査の結果、土師・須恵器片とともに住居址のプランが検出され、遺跡の存在が確定された。この結果、施工前の発掘調査による遺跡の記録保存が必要となり、埋蔵文化財発掘調査の委託契約を平成 15 年 1 月 6 日付で締結した。しかし、平成 14 年度末に至っても用地買収が難航しており、調査に入れる目途は立っていなかったため、予算と契約を平成 15 年度に繰り越して、用地買収が完了した平成 15 年 5 月 8 日、現地調査に着手した。

第２節　調査の方法

1. 遺跡名と略記号

周知の埋蔵文化財包蔵地である林之郷遺跡群は、複数の遺跡により構成されている。『上田市の原始・古代文化』（1977 年上田市教育委員会）によれば、漆戸の茅御堂、林之郷の境畑・貝戸・池田・狐塚・松ノ木・下ノ畑、蒼久保の中村Ⅱなどの８遺跡により構成されているという。（その後の調査で、漆戸の西平、林之郷の金井地籍にも存在することが判明している。）

過去には、漆戸の茅御堂地籍の調査において、単独の遺跡として扱った経過もあるが、遺構密度の濃淡はあるにしろ、全体として弥生時代後期から平安時代の集落遺跡であり、立地も神川左岸第２段丘上の微高地にあることから、昭和 63 年の調査以降は、「林之郷遺跡群」という一連の遺跡としてとらえてきた。従って、遺跡略号は「Hayashi-No-Gou」の頭文字 HNG を遺跡の略号として付してきた。また、今回の調査区は、過去に A・B・C・E 地点の調査を行ってきており、調査予定であった D 地点の調査がなかったため、今回の調査地に付し、今回の調査の略号として「HNG-D」を用い、各種の記録や遺物の注記等に用いた。

2. 調査区の設定

調査区域は、遺跡の存在が知られた今回の道路拡幅部分である。現在の路面は、改修がなされるものの、路盤下に遺跡が保存されているため、現状保存とした。

3. グリッドの設定

過去の林之郷遺跡群の調査においては、最終的に空中写真撮影で座標値を抑えているものの、調査中のグリッドは全く任意のものであった。今回の調査においては、改めて国家座標に則ったメッシュを切り、1 単位の大きさが３×３ mのグリッドを設定した。メッシュ交点には記号を与え、座標値 X=43,200.00、Y=-18,651.00 を A00 として、南方向に A、B、C、D…、東方向に 01、02、03、04…という順に進むものである。例えば、基準点から南に 18 m、東に 21 mの地点は F07 と

表される。各種の現地平面測量には、このメッシュ番号が用いられている。また、グリッド番号は、北東の交点のメッシュ番号を用い、遺物の取り上げに用いた。

4. 遺構測量

遺構の平面測量は、前述のメッシュを基準に1/20縮尺で行った。また、現地調査終了時には、ラジコンヘリコプターによる空中写真測量も行っている。断面図や土層図は手取りによるものであり、エレベーション図作成には、空中写真測量の成果も用いている。

5. 遺構の掘り上げ

現地調査における表土の除去は、主に重機によって行い、その後遺構検出作業、遺構掘り上げ作業はすべて人力で行った。

第3節　調査日誌

平成15年

5/ 8　現地調査着手。調査区西端から東に向かって道路拡幅幅で表土を剥ぐ。昨年の試掘調査で検出された住居跡を再度検出した。

5/13　調査区南側に所在する農機具小屋への導入路を遺構の検出されなかった場所に改めて取り付ける。

5/14　表土剥ぎを続ける一方、遺構の検出された箇所の精査を作業員により行う。本日までで、竪穴住居跡6件、掘立柱建物跡2件などが検出される。

5/19　古川石材跡地の試掘調査。遺構はなく、調査対象地からは外す。いったん現地調査を休止する。

6/ 9　現地調査を再開する。測量業者によるメッシュ杭打ちと、現場作業員による遺構検出作業を行う。遺構検出作業はこの後、6/13まで行う。

6/16　遺構掘り上げ作業に着手

6/25　遺構掘り上げ作業をするとともに、空中写真撮影に備えて調査区周辺の草刈りを行う。

6/27　岩瀬農機西側の住宅跡地の試掘調査（表土剥ぎ）を行う。遺物は若干出土するものの、遺構はなく、5/19の調査とあわせると、林之郷遺跡の西端が小諸上田線から梅ヶ丘団地に入る市道までと判断される。

6/30　空中写真撮影を行う一方、現場機材を撤収してすべての現地調査を終了する。

以降、埋蔵文化財整理室において、遺構図等の実測図面や遺物の整理作業、報告書編集作業を行い、平成16年3月19日に調査報告書を刊行してすべての調査事業を終了した。

第二章　遺跡の環境

第１節　自然的環境

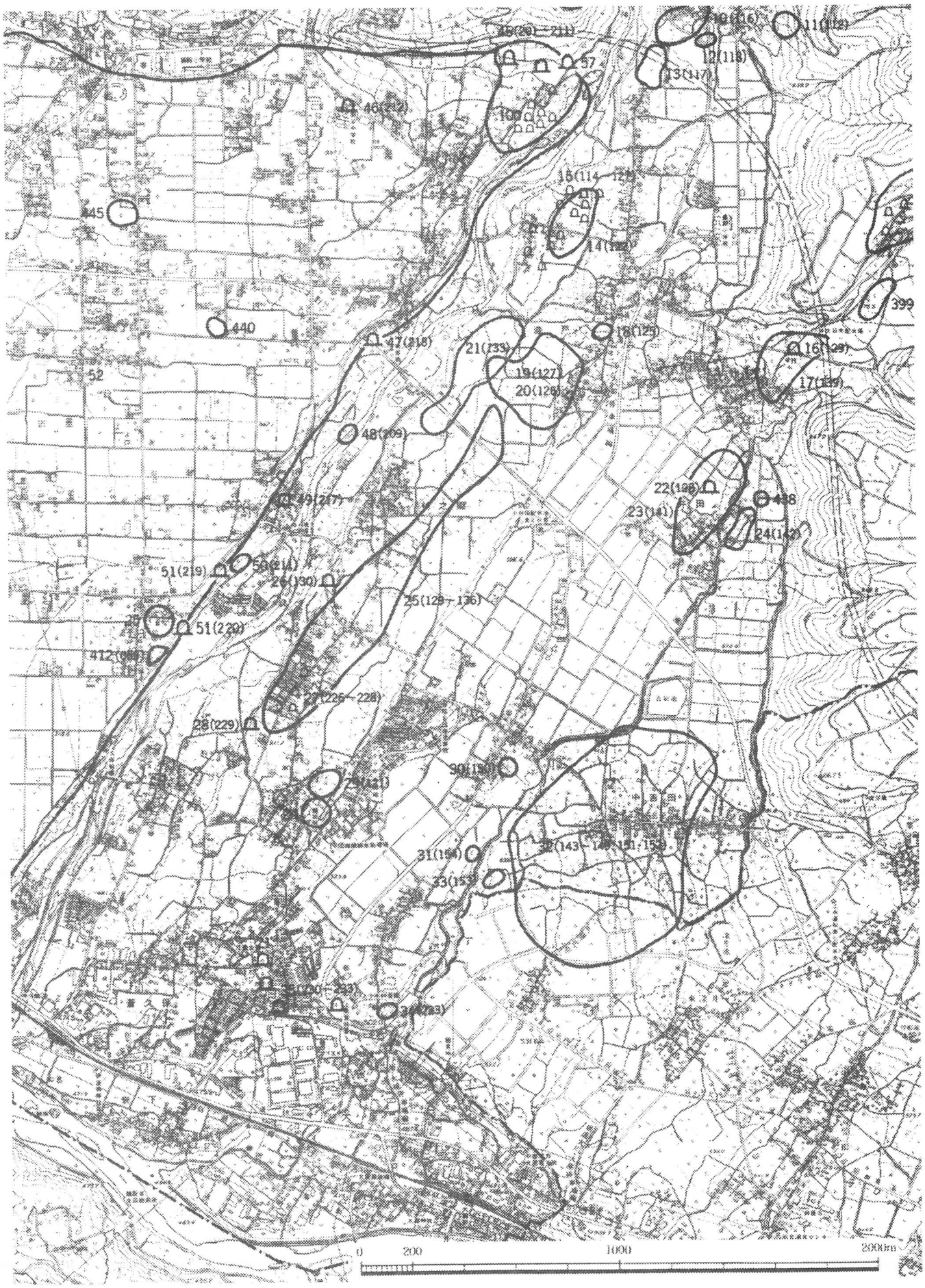
林之郷遺跡が位置する地域は、千曲川右岸に展開する上田盆地の東側にあたる。ここは特に上田盆地の北東部に聳える四阿山（2,332m）に源をもつ神川によって形成された一大扇状地形を呈する地域である。神川左岸の神川扇状地では、第１段丘面・第２段丘・第３段丘面及び赤坂集落の谷口扇状地などから構成されている。第１段丘面では標高約 580 mの大日ノ木集落付近を頂点として半径 4km の規模で南に広がり、その先端部は 500 mの標高をもって段丘崖として終わる。またこの押出しが第２段丘にも及び、新しい扇状地をつくっている。現在の神川は回春して下刻し、この面よりかなり低いところを流れているが、長い年月のうちに流路が次第に西に偏したため、このように南北方向に見事な三段の段丘を形成しているといえるのである。

第１段丘面は現河床面より約 20 ～ 30 mの比高をもち、森・大日ノ木・小井田・町吉田などの各集落が立地する広い面で、通称吉田面と呼ばれている。この面の地質は神川の運んだ厚い砂礫層からなり、地表面は１～２mほどの厚さを持つローム層に覆われている。古くから周辺の神明川や瀬沢川から、この面に水を取り入れたり、また吉田堰（童女堰）の開削などによる開拓が行われたため、現在立派な水田地帯となっている。しかし、昭和 62 年度この面の大字芳田字訳口上に所在する訳口上遺跡の発掘調査を実施した地域では、水便の悪さのため、下流の水田地帯へ用水を公平に配分する用水堰の分配施設としての「分け口」が字名になったと見られ、水に苦心をしたかつての歴史を見る。近年この面の段丘崖に沿って、桜台・みすず台などの住宅団地もでき、また浅間山麓広域農道などの開通に伴って、様相が一変しつつある。

第２段丘面は今回発掘調査した林之郷遺跡が位置する面で、第１段丘より約 10 ～ 12 m低く形成されている。この面も比較的広く林之郷や上青木など五つの集落があり、林之郷面と呼ばれている。地質も第１段丘面と比べて、あまりローム質の強くない土層で比較的通水性もよく、またいくつかの用水堰に恵まれているため、現在同様に広い水田地帯になっている。この面もまた宅地化の波が押し寄せてきていることもいなめない。林之郷集落周辺では、住宅のある部分がやや高い微高地となっており、集落東側、すなわち第１段丘崖下で低くなる、いわゆる後背湿地の様相を呈していることがわかる。遺跡の主体部は、したがってこの若干高い部分の集落の中で、さらに一帯に広がっていることが分布調査で確認されている。また、第３段丘面は全体的には神川氾濫原としての比較的狭い平坦面としてとらえられている。この段丘面に包括されている久保林集落のあるところは、２～３m高い微段丘を形成して安全な平坦地となっている。この面は久保林面と呼ばれているところであるが、やはり近年宅地化が急速に進化しており、かつての景観が変貌している。

一方、神川右岸の染屋面では 25 m内外の急崖となっており、僅かにベンチ状に第２・第３段丘が形成せれているだけである。これは前述の通り、神川の流路が下刻と同時に漸次西偏したため、東側の左岸では見事な段丘となるのに対して、右岸では浸蝕され段丘が形成されにくいといえる。

今回の調査区域内でみると、林之郷遺跡が立地する微段丘を形成する過程において、幾たびかの氾濫があったようである。SB-01 東側の遺構検出面は、砂の混じった礫層となっている。SB-03 ～ 05、ST-01 は、この礫層をくり抜いて作られている。一方、これらの遺構の覆土は砂礫が混じるものの、土砂等で一気に埋まった様子は見られず、住居の廃棄後に暫時埋まっていったようであるので、遺跡が形成された弥生時代以降は、比較的落ち着いた立地となっているようであるが、現在でも大雨の際には、たびたび床下浸水等、被害が報告される地域でもある。



第１図　林之郷遺跡群周辺遺跡分布図【番号は県の遺跡番号で、()内の数字は、市の番号である。】

番号	遺跡名	時代	備考	番号	遺跡名	時代	備考
2	石矢遺跡	縄弥平		30	荒神田遺跡	平	
3	赤坂将軍塚古墳	古	市指定史跡	31	訳口上遺跡	奈～平	87年度調査(市)
4	托田遺跡	縄・平		32	中吉田遺跡	縄弥平	
5	北屋敷遺跡	縄・平		33	今井遺跡	平	
6	城山遺跡	縄		34	いなご坂遺跡	縄	
7	上組遺跡	平		35	吉田原古墳群	古	
8	矢沢古墳	古		39	中道遺跡	縄・弥	
9	宿組遺跡	平		40	上野東遺跡	縄	
10	平沢遺跡	平		41	陣馬塚古墳	古	93年調査(県)
11	下左口遺跡	縄		42	玄馬塚古墳	古	
12	下樋口遺跡	平		43	熱泰寺古墳	古	
13	石坪遺跡	弥		44	熱泰寺遺跡	縄	
14	神林遺跡	縄弥平	91年調査(市)	45	七ツ塚古墳群	古	市指定史跡
15	下郷古墳群	古	91年調査(市)	46	塚田塚古墳	古	
16	大日ノ木古墳	古		47	野竹塚古墳	古	
17	大日ノ木遺跡	縄弥平	93～95調査(県) 01調査(市)	48	篠井久保遺跡	弥・平	
				49	笹井塚古墳	古	
18	北の平遺跡	平		50	掛の宮遺跡	縄・古	
19,20	八千原・堂下遺跡	縄～平	90年調査(市)	51	掛の宮古墳	古	
21	太田遺跡	平	74・95年調査(市)	52	染屋台条里水田遺跡	弥～平	断続的に調査
22	柴崎古墳	古		54	国分遺跡群	弥～平	97～99調査(市)
23	井戸田遺跡	縄弥平		56	国分寺周辺遺跡群	弥～平	00～01調査(市)
24	尾無遺跡	縄・平		398	氷沢古墳群	古	
25	林之郷遺跡群	縄～平	88・90年調査(市)	399	氷沢遺跡	縄・平	
26	日ノ井古墳	古		407	矢沢氏支城跡	近	
27	高寺古墳群	古		410	伊勢崎城跡	近	
28	生地場古墳	古		412	岩門城跡	近	
29	中村遺跡	縄		備考の数字は西暦で、()内は調査主体である			

第1表　林之郷遺跡群周辺遺跡一覧表（番号は、県の遺跡番号である。）

第２節　歴史的環境

上田市域の東側にあたる一帯の歴史的環境を見てみると、とくに考古学的遺跡で烏帽子岳西南麓に分布する遺跡として把握され、各段丘からは縄文期から奈良・平安時代に属すいくつかの遺物・遺構が確認されている。

今回調査を実施した第２段丘面の考古遺跡から概観すると、まず林之郷遺跡群は、北から漆戸・林之郷・蒼久保の地籍に長くまたがり、小字としては北から、漆戸の西平・茅御堂、林之郷の境畑・貝戸・池田・狐塚・松ノ木・下ノ畑・金井、蒼久保の中村などの各遺跡があり、今回の調査地点は、遺跡群の最南端中村地籍である。また、この遺跡群の北側には林之郷地籍の太田、漆戸地籍の八千原・堂下・北の平などの遺跡が確認されている。

このうち、今回調査地の北 100m の林之郷の狐塚・金井地籍は、昭和 63 年 2,200 平米の発掘調査を実施しており、古墳時代後期から平安時代末の住居址 16 件や掘立柱建物址 3 件などを検出している。また、今回調査地点の 1km 北方の太田・茅御堂の両遺跡は、昭和 49 年広域農道建設に伴う事前の発掘調査が行われ、太田遺跡からは古墳時代後期の住居址 4 軒、同期の高床状遺構、また平安時代国分期の住居址 4 軒とこれらに伴う豊富な遺物を検出した。また茅御堂遺跡からも古墳時代前～後期の各住居址及び集石遺構・竪穴遺構とそれぞれに伴う遺物が検出され、この地域の様相がかなり明らかにされたのである。太田遺跡から北に連続して広がる法楽寺遺跡については、平成 7 年から 10 年にかけて 2 万平米にわたる発掘調査を実施し、弥生時代後期、古墳時代後期、奈良・平安時代の住居址 500 件余りを検出し、現在整理作業を行っている。また、茅御堂遺跡の北側については、平成元年に「林之郷遺跡 E 地点」として 4,000 平米の発掘調査を実施し、弥生時代後期の住居 1 件と消失家屋を含む古墳時代後期の住居址 26 件を検出した。

また、林之郷遺跡群の北側、法楽寺遺跡の東側微段丘上に広がる八千原遺跡も平成元年に 8,000 平米にわたる発掘調査を実施し、縄文時代中期から後期の、敷石住居を含む住居址 68 件の他、埋甕、集石遺構を多数検出している。

古墳では、今回調査地点から 1.4km 北方の下郷地籍に所在する下郷古墳群は、平成 2 年度の発掘調査で 4 期を調査し、直刀や雲珠（うず）などの副葬品とともに人骨も出土している。前述の法楽寺遺跡においても、円墳の周溝が確認されている。調査地の南側では、蒼久保字中村に高寺古墳 1・2・3 号墳が、およそ 30 m前後の間隔で南北に並んでいる。

いずれもほとんど破壊された古墳で、正確な規模は不明であるが、3 号墳の残存状態等から直径約 5 m・高さ約 1 mほどの比較的小規模な終末期古墳と見られる。同様な規模の生地場古墳が高寺古墳の僅か西南部の墓地内にある。また、林之郷字塚田の段丘端部にも日ノ井古墳がある。この古墳も墓地内にあり、墳丘が破壊され石室が露出しているが、直径約 9 mほどの円墳とみられる。なお、対岸の第 2 段丘面にあたる笹井地籍にも、笹井塚古墳・掛ノ宮塚古墳また第 1 段丘面の社宮寺古墳等の小規模な終末期古墳があり注意される。このうち特に笹井塚古墳からは、かつて直刀 2 本と刀子などが発見されている。

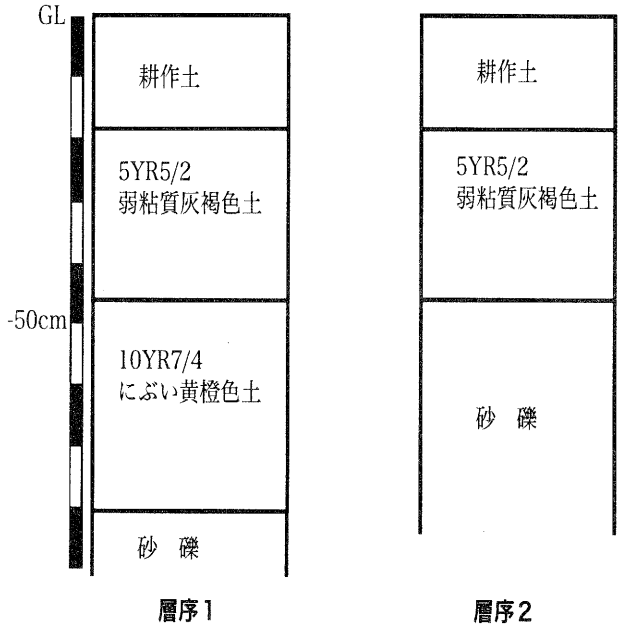
古代以前の当地域の歴史は、考古学的な知見の中でしか知り得なかったが、前述の法楽寺遺跡の発掘調査において出土した銅印「宍来（未）私印」により、古代朝廷に獣肉を献上していた「宍部」「宍人部」の存在が注目されている。また、同遺跡からは、金銅三尊仏や磬などの仏教法具も出土し、「法楽寺」という地名が、その東南にある「茅御堂」の地名と相まって、現実味を帯びてきている。同時に、『日本霊異記』下巻 23 話の「小県郡嬢里の大伴連忍勝」の説話の嬢里は、『和名抄』の「童女 (嬢) 郷」であり、正倉院宝物の「海野郷」に比定され、林之郷遺跡の東側、第一段丘上を流れる「嬢堰（吉田堰）」の存在もあって、現在の東部町から神川左岸に比定されており、俄然上田地域の古代史研究の注目されるところとなっている。

中世以降については、この地に上田と中世豪族の祢津氏の居館址といわれる東部町祢津の古御館を結ぶ「祢津道」が通り、その道路沿いの集落として発展してきた。今回の調査地はこの「祢津道」の通過ルートである。

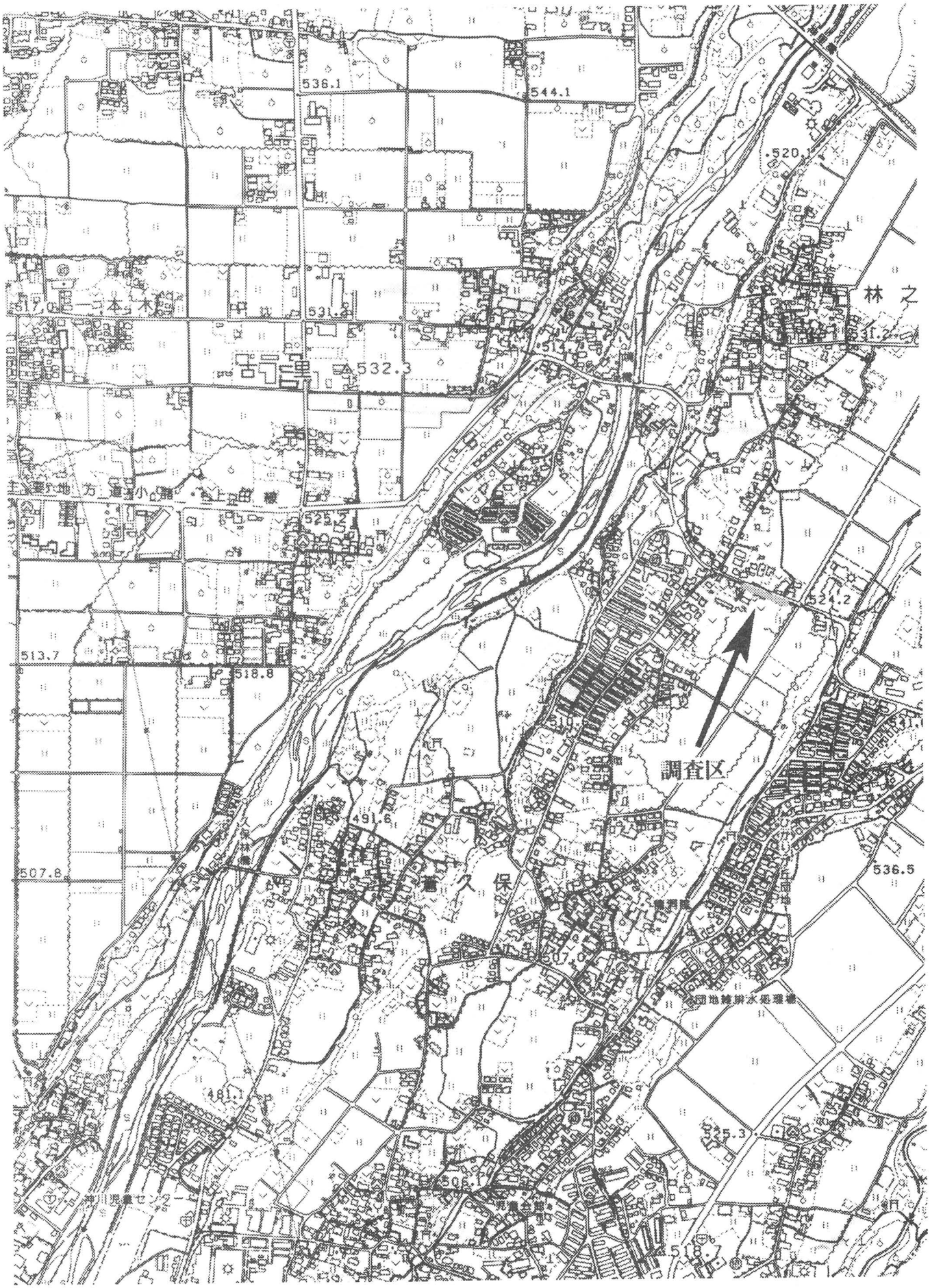
第３節　遺跡の基本層序

林之郷遺跡の基本層序は、次の図のとおりである。

層序１は、SB-01・02 付近のもので、東に向かうに従って、暫時層序２のパターンとなる。SB-04・05 付近は層序２のとおりで、砂礫層に住居を掘り抜いて造っている。



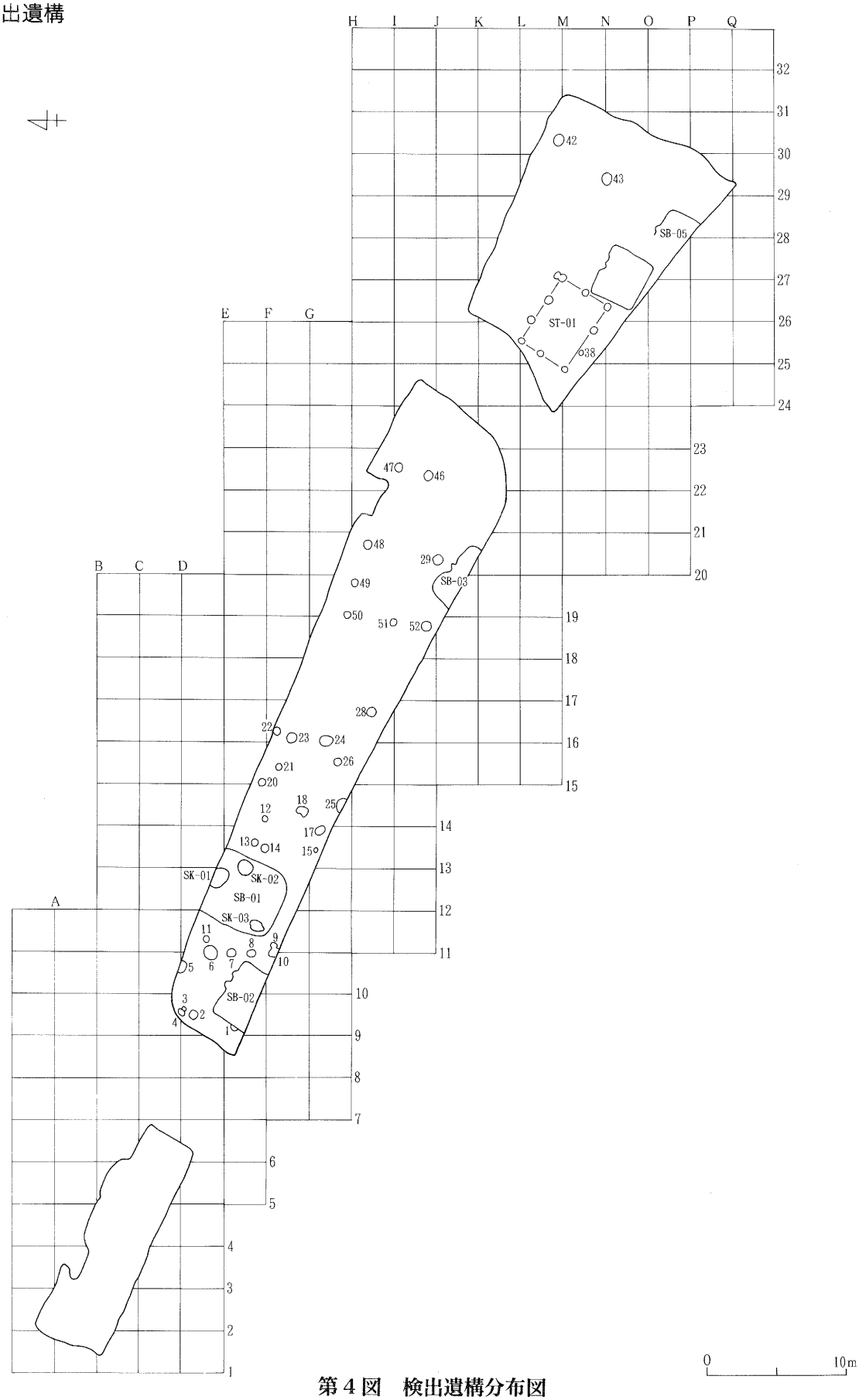
第２図　調査区の基本層序


536.1
544.1
520.1
一本木
531.3
532.3
林 之
525.2
524.2
513.7
518.8
調査区
491.6
507.8
富久保
536.5
507.0
481.1
535.3
506.1
518.

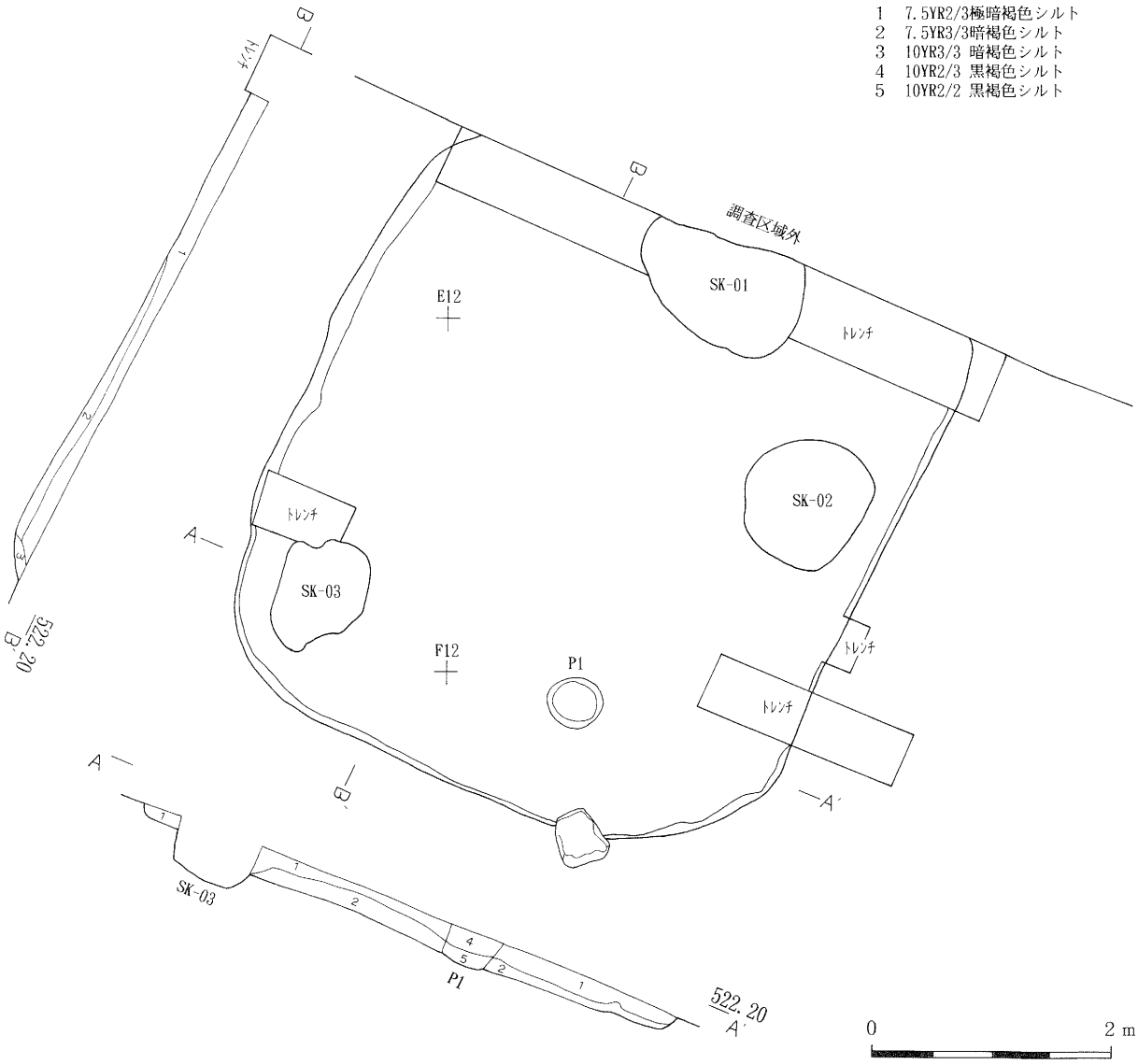
第３図　調査位置図

第３章　調査の結果

1. 検出遺構



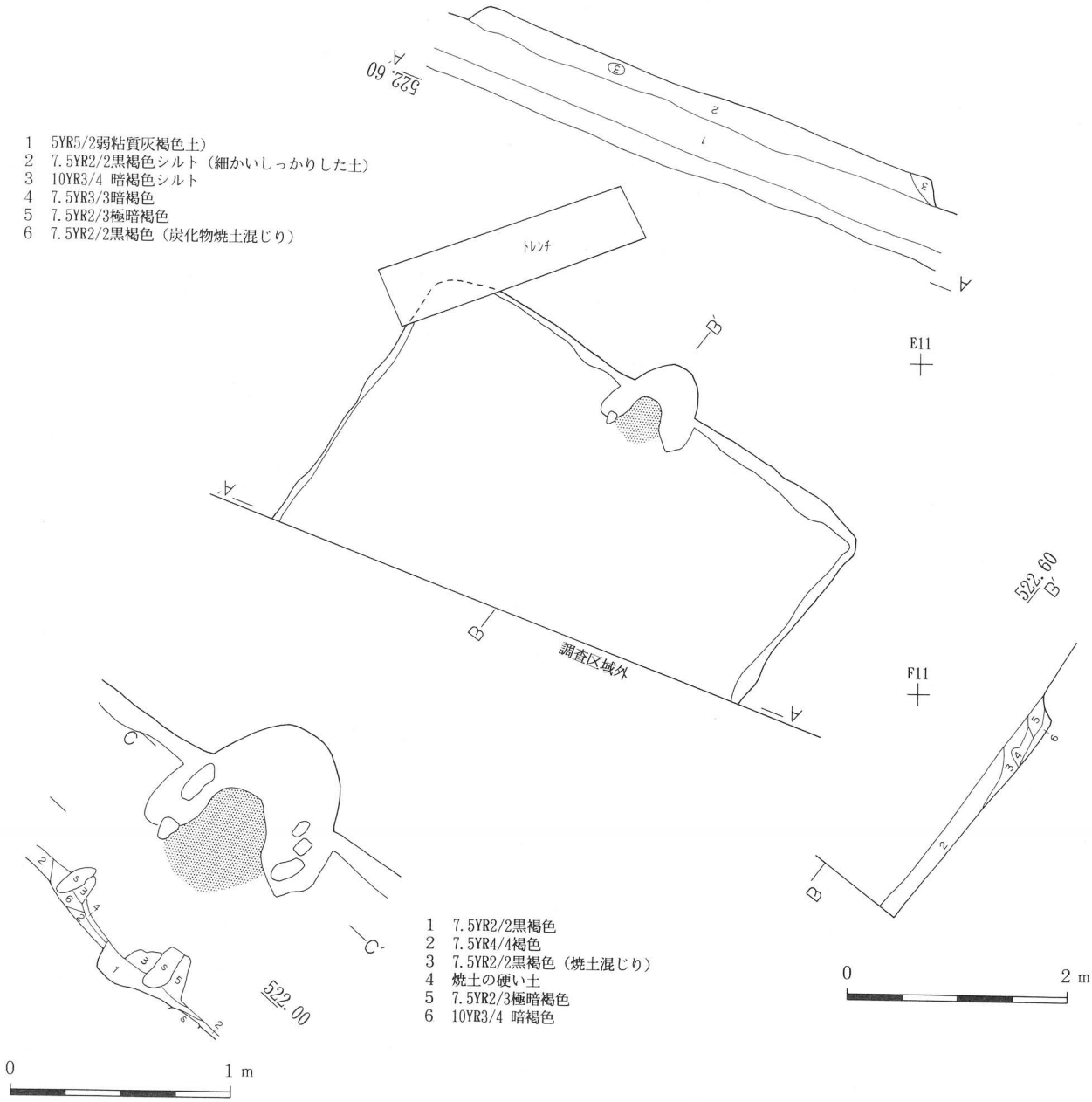
第４図　検出遺構分布図



第５図　SB-01 遺構実測図

位置	グリット	D12,E12,F12,D13,E13,F13,D14.E14,F14			竈	位置		主軸方位
	標　高	521,75～521.95				規模		
規模	規模	？×5.06	床面積	不明	備考	住居址北側は現道路敷き下に入り、全体の規模は不明。竈も道路敷き下にあるものと思われる。SK-01,02,03に切られる。		
	壁高	南壁0.22　西壁0.12						
平面形態	隅丸方形		主軸方位	N-25°　-E				

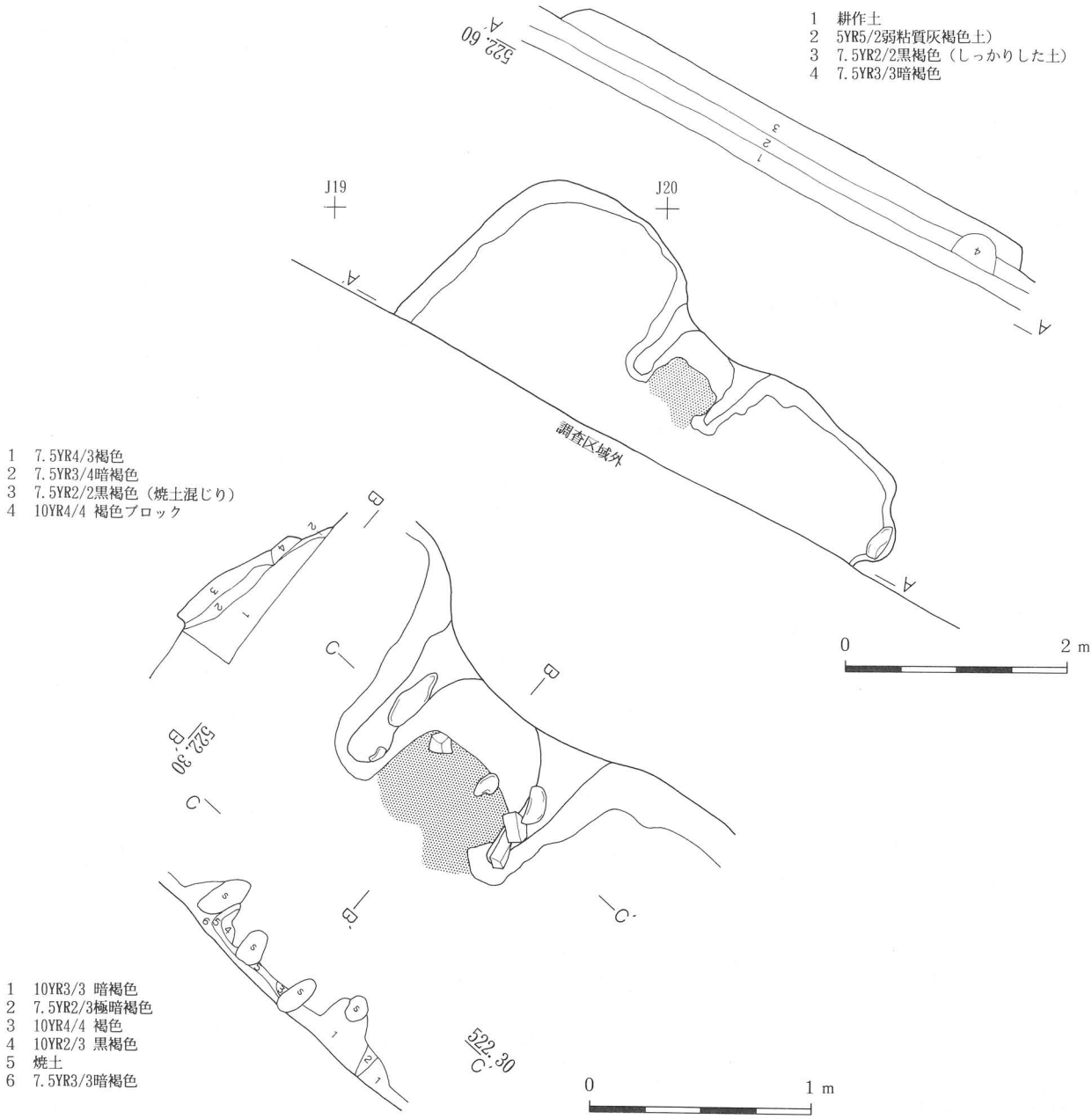
第２表　SB-01 遺構観察表



第６図　SB-02 遺構実測図

位置	グリット　D10 E10 E11				竈	位置	北東壁中央	主軸方位	N-42°　-E
	標　　高　521.75～521.80					規模	0.80×0.90		
規模	規模	40×？	床面積	不明	備考	住居址南側は調査区域外に入っており、全容は不明。床は堅緻に叩き締められている。			
	壁高	北東壁0.22							
平面形態		隅丸長方形？	主軸方位	N-35°　-E					

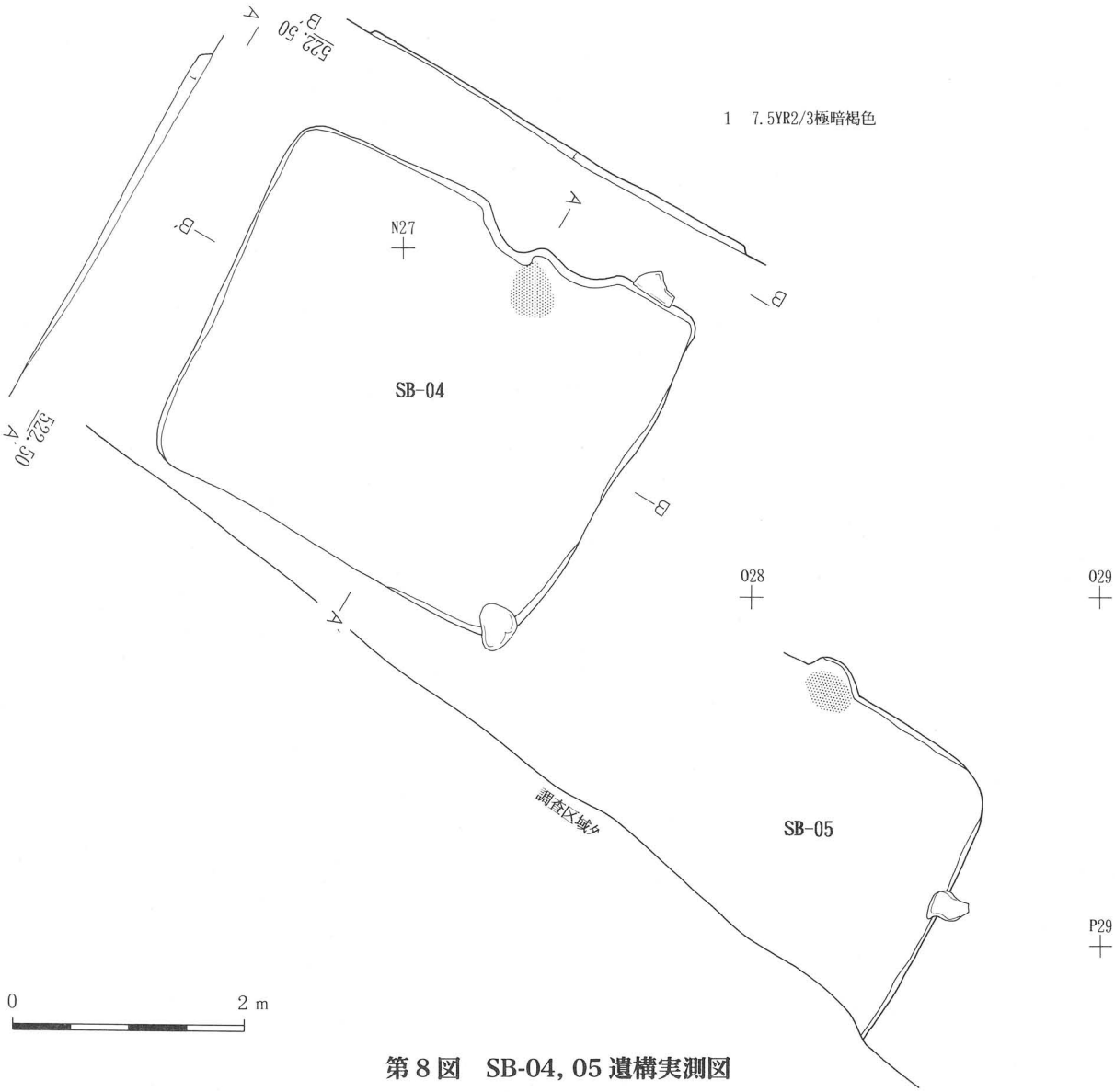
第３表　SB-02 遺構観察表



第７図　SB-03 遺構実測図

位置	グリット	I20 J20 J21			竈	位置	北東壁中央	主軸方位	N-45° -E
	標　高	521.93～521.96				規模	1.20×0.95		
規模	規模	4.66×？	床面積	不明	備考	住居址の南半部は調査区域外となっている。遺構の一部が攪乱により破壊を受けているが、全体としての残存状況はよい。			
	壁高	北西壁0.22　東南壁0.20							
平面形態		隅丸長方形？	主軸方位	N-45° -E					

第４表　SB-03 遺構観察表



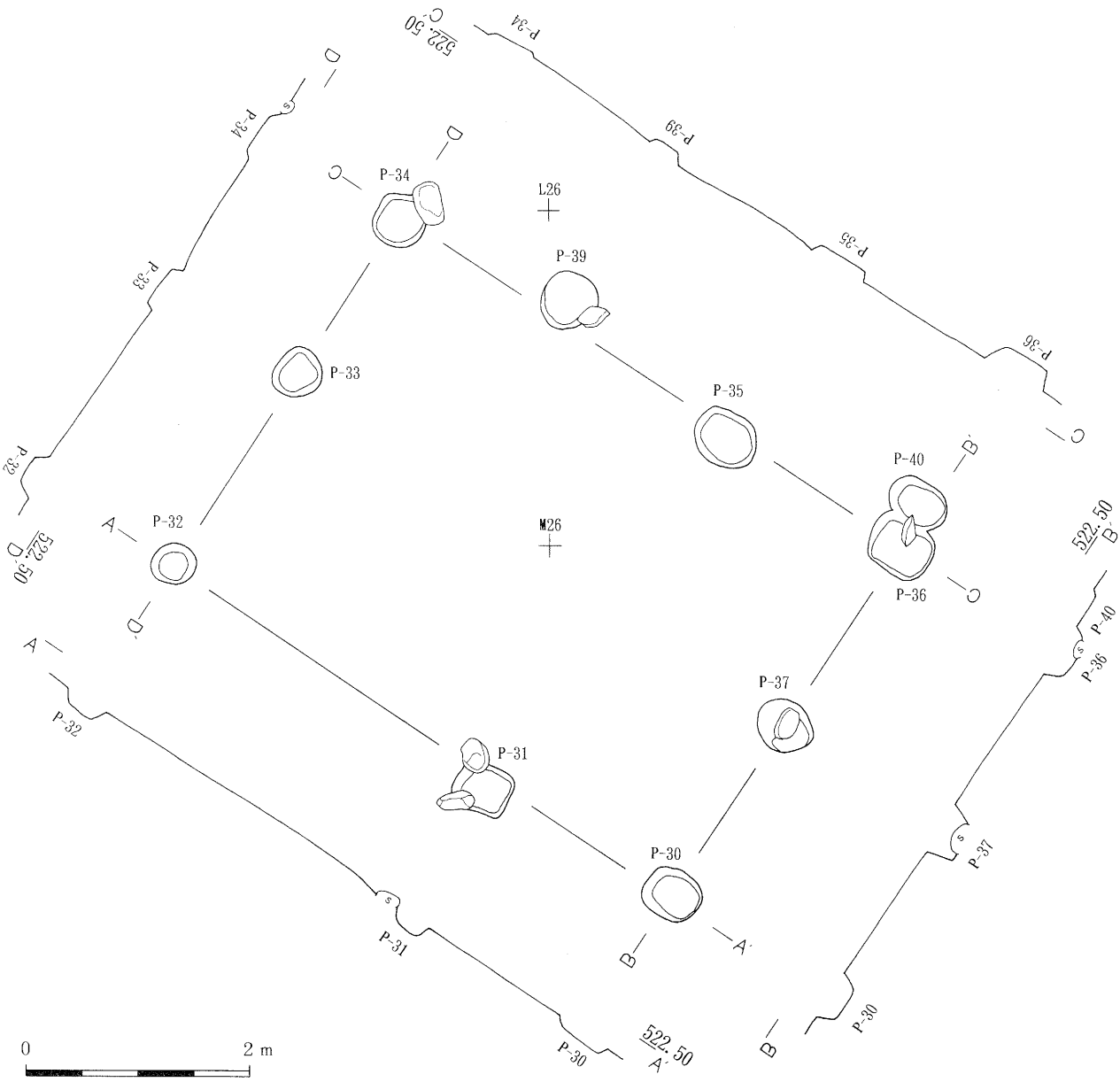
第 8 図　SB-04, 05 遺構実測図

位置	グリット	M27 M28 N27 N28 O28			竈	位置	北東壁中央	主軸方位　不明
	標　高	522.16～522.21				規模	不明	
規模	規模	3.90×3.30	床面積	11.7	備考	検出時から床面の一部が露呈していた。竈は支脚が残るものの、袖等は残っていなかった。		
	壁高	北壁0.12　西壁0.04						
平面形態		隅丸長方形？	主軸方位	N-28.5°　-E				

第 5 表　SB-04 遺構観察表

位置	グリット	M27 M28 N27 N28 O28			竈	位置	北東壁中央	主軸方位　不明
	標　高	522.16～522.21				規模	不明	
規模	規模	3.90×3.30	床面積	11.7	備考	床面だけで検出されるが、それも西半部は残っていなかった。		
	壁高	北壁0.12　西壁0.04						
平面形態		隅丸長方形？	主軸方位	N-28.5°　-E				

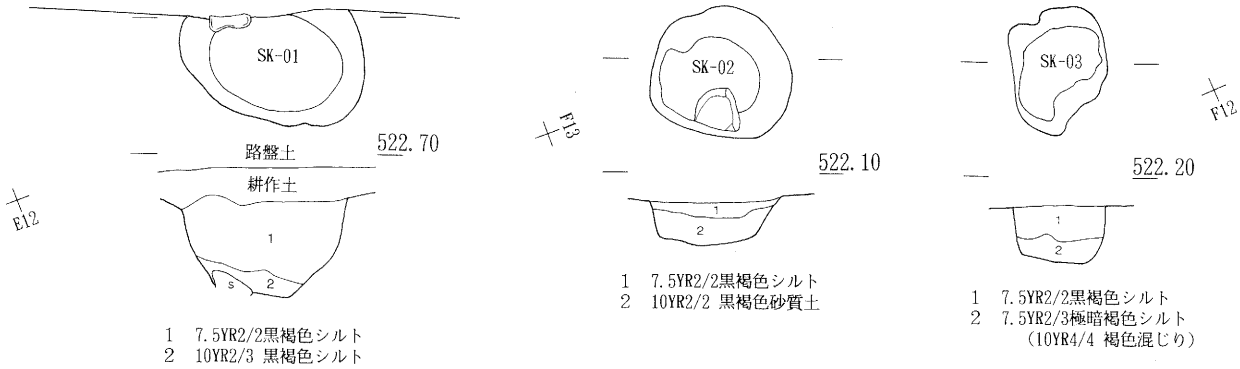
第 6 表　SB-05 遺構観察表



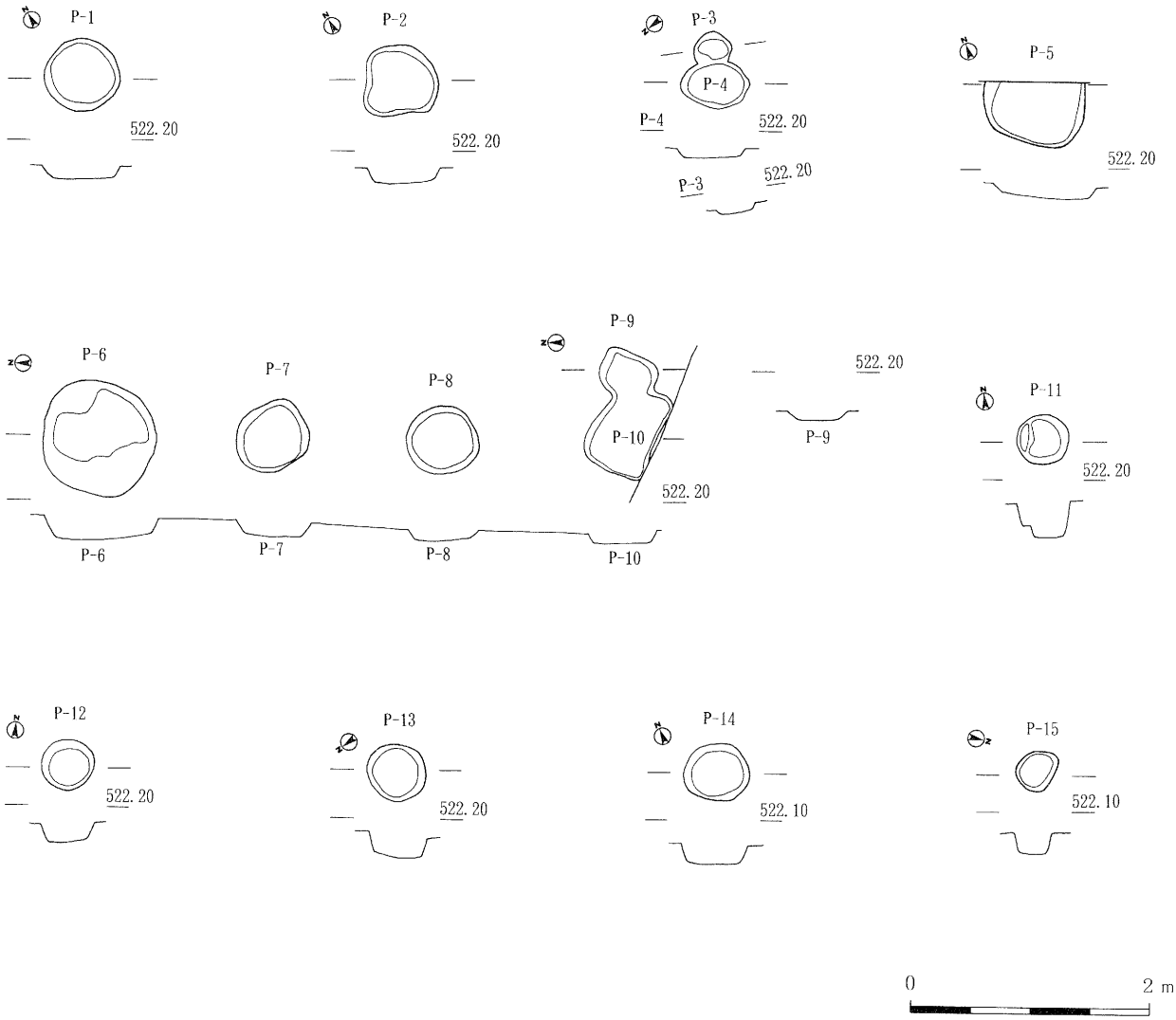
第９図　ST-01 遺構実測図

位置	グリット	L26～27　M25～28　N27	構成ピット	P3O,P31,P32,P33,P34,P35,P36,P37,P39,P40（各ピットのスケールはピット一覧表を参照）
	標　　高	522.28（柱底部）		
規模	桁行3間（5.40m）梁行2間（3.80m）			
	柱間寸法	桁行1.8m　梁行1.9m	備考	
主軸方位		N-65°-W		

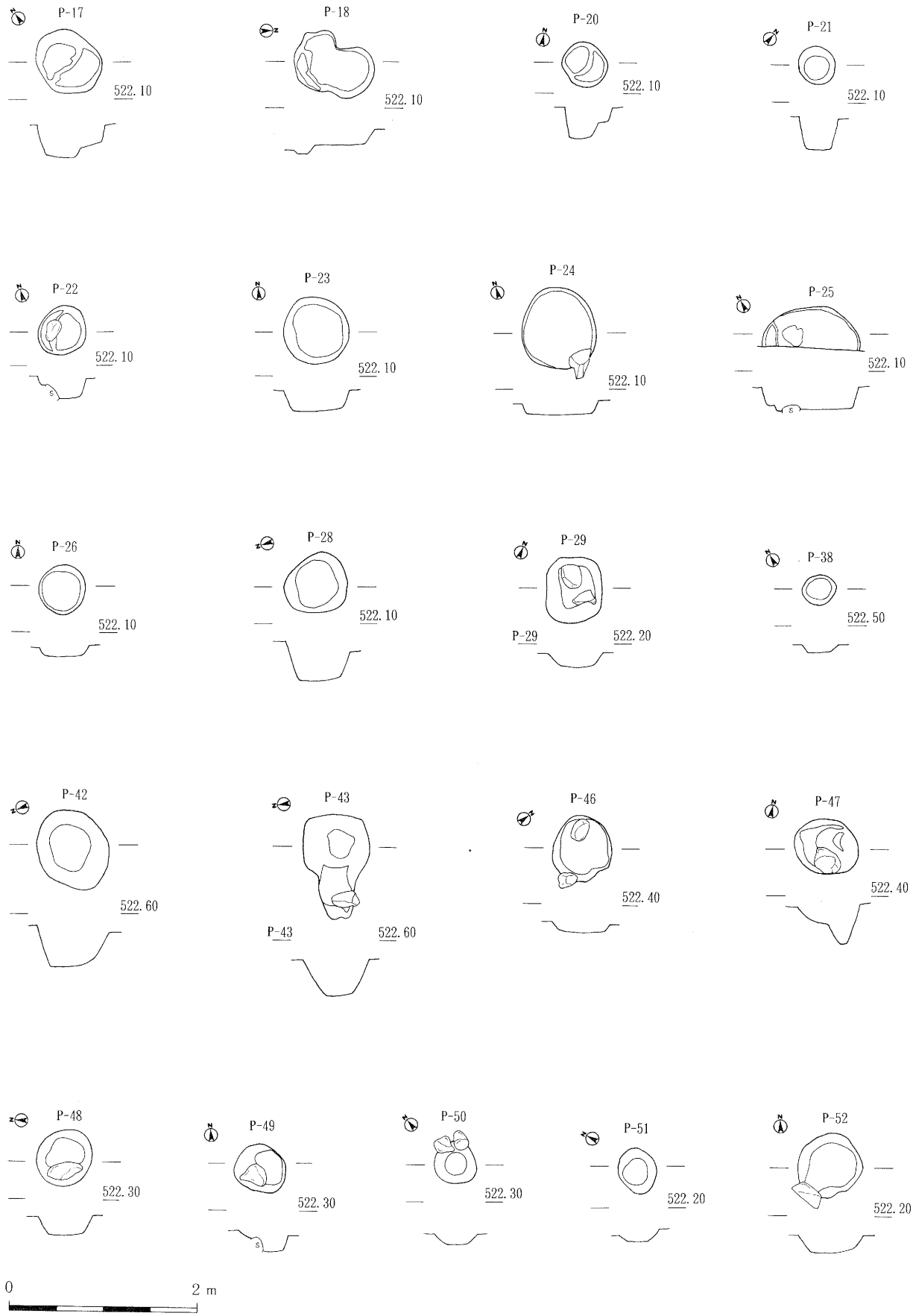
第７表　ST-01 遺構観察表



第10図　SK実測図



第11図　ピット実測図(1)

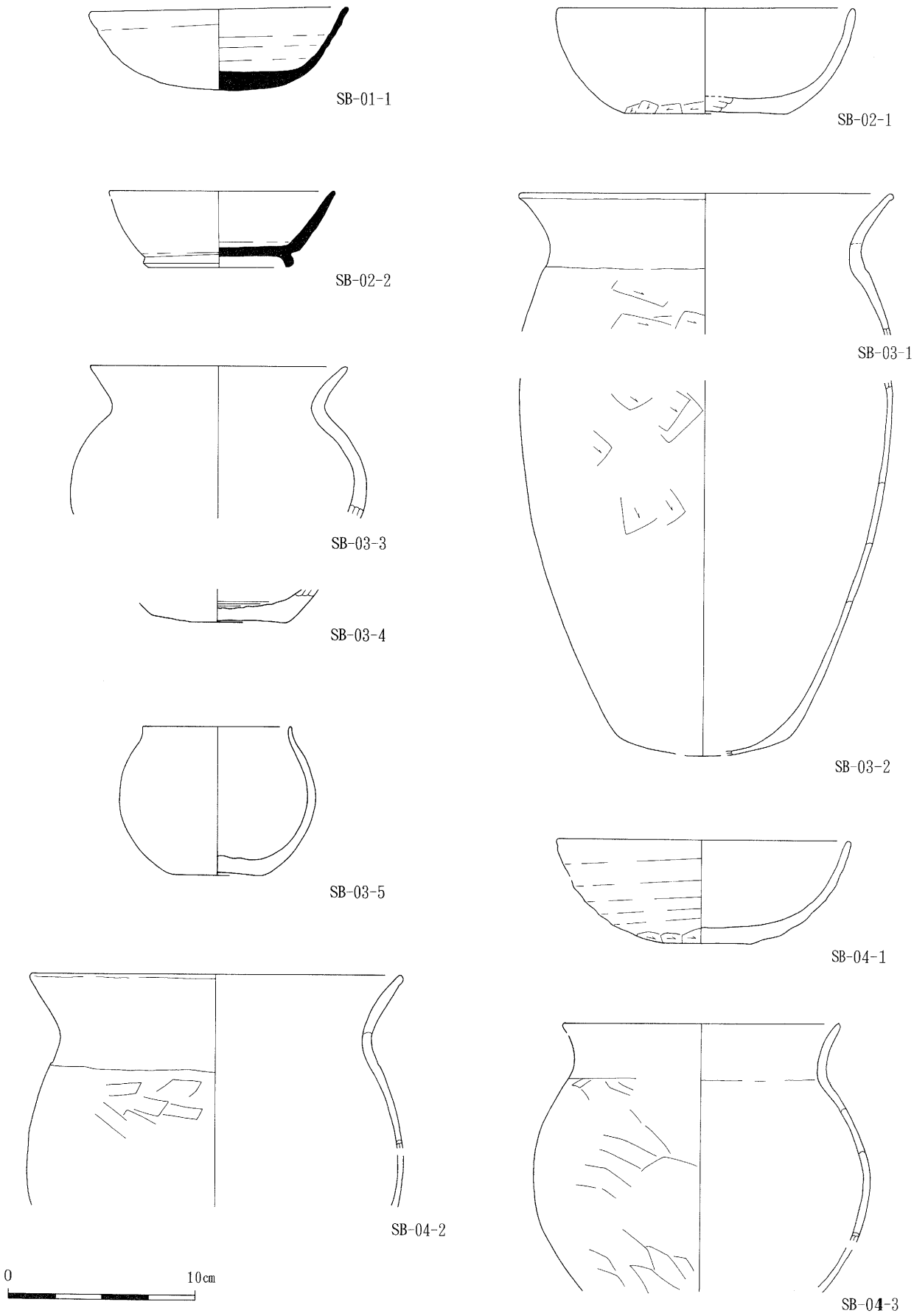


第12図　ピット実測図(2)

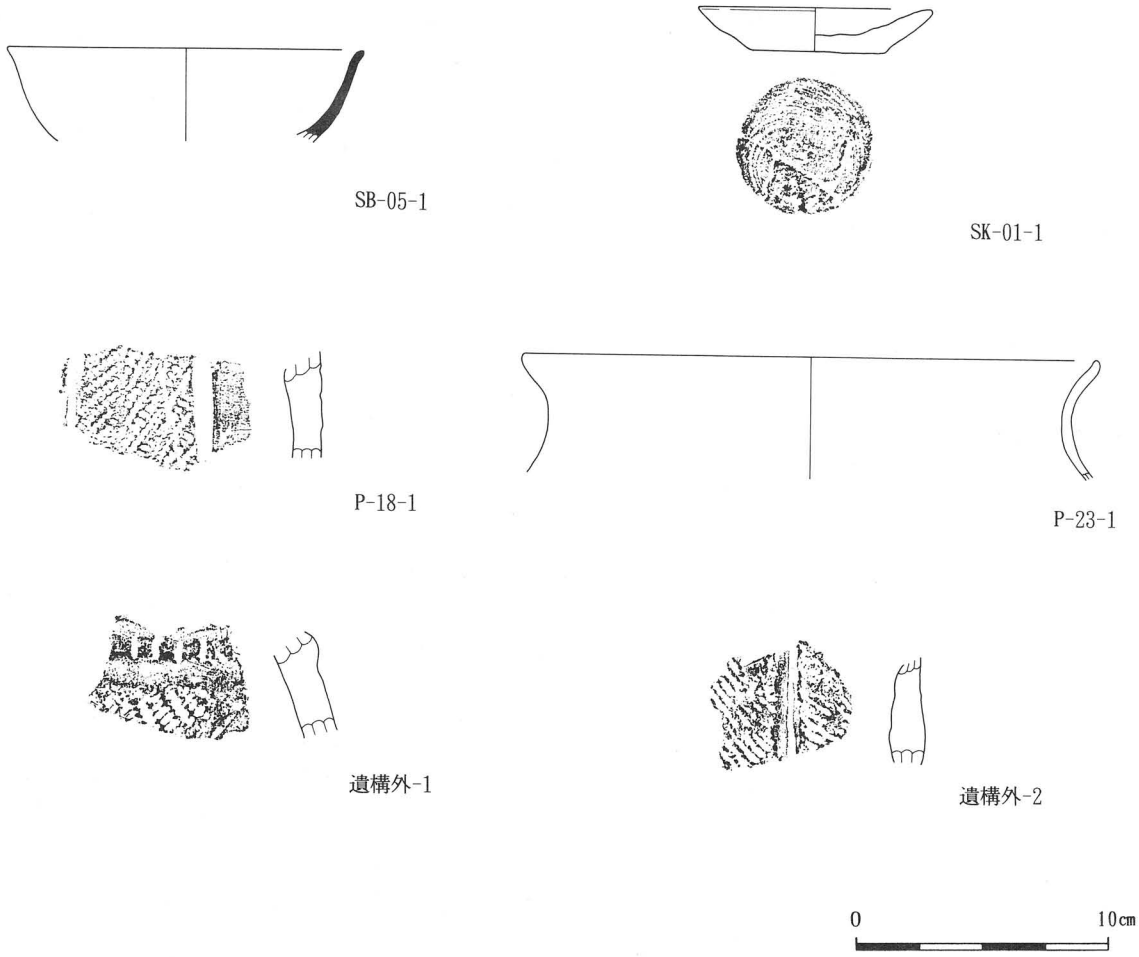
遺構-No	長　径	短　径	深　さ	備　　考	遺構-No	長　径	短　径	深　さ	備　　考
SK-01	151	(110)	72	SB-01を切る	P-25	105	—	20	
SK-02	110	102	32	SB-01を切る	P-26	52	50	11	
SK-03	102	74	44	SB-01を切る	P-28	68	64	40	
P-01	64	61	10		P-29	69	59	16	
P-02	63	54	12		P-30	50	44	7	ST-01構成ピット
P-03	32	(28)	6	P-04に切られる	P-31	52	42	14	ST-01構成ピット
P-04	57	40	7	P-03を切る	P-32	40	36	13	ST-01構成ピット
P-05	68	(68)	10		P-33	45	44	8	ST-01構成ピット
P-06	100	95	20		P-34	48	47	10	ST-01構成ピット
P-07	62	60	12		P-35	60	50	7	ST-01構成ピット
P-08	60	56	10		P-36	62	53	20	ST-01構成ピット
P-09	44	35	8	P-10を切る	P-37	52	46	23	ST-01構成ピット
P-10	75	54	10	P-09に切られる	P-38	37	30	7	
P-11	44	42	30		P-39	52	50	7	ST-01構成ピット
P-12	45	42	16		P-40	56	(37)	7	ST-01構成ピット
P-13	50	47	18		P-42	92	72	41	
P-14	56	48	15		P-43	110	70	40	
P-15	36	32	16		P-46	68	62	8	
P-17	74	52	33		P-47	70	59	36	
P-18	86	56	30		P-48	62	57	20	
P-20	48	46	32		P-49	54	51	18	
P-21	40	38	35		P-50	46	44	10	
P-22	54	51	23		P-51	47	40	13	
P-23	75	70	22		P-52	70	64	20	
P-24	88	78	14						

第８表　SK、ピット遺構観察表

2. 出土遺物



第 13 図　出土遺物実測図(1)



第 14 図　出土遺物実測図(2)

遺構NO 図版NO	器種 種類	法　量 残　存	器　質	成形・形態ほか	整形ほか
SB-01 1	坏 須恵	口径　14.0 器高　4.4 口縁2/3～底部完	胎；石英、礫、粗砂粒含む 焼；良好 色；(外)5Y6/1 5/1灰 7.5YR6/4にぶい橙 (内)5Y6/1灰　7.5YR6/4にぶい橙	丸底から体部外内面は稜を有して外傾して立ち上がる　器高に歪みあり 轆轤成形	(外) 口縁～体部轆轤による撫で 底部轆轤による篦切りの後撫で (内) 口縁～体部轆轤による撫で 底部撫で　一部酸化炎焼成となる
SB-02 1	坏 土師	口径(16.0) 器高 5.8 底径 (8.8) 底～口縁部1/4	胎；雲母、粗砂粒含む 焼；良好 色；(外)7.5YR6/4にぶい橙　3/1ｵﾘｰﾌﾞ黒 (内)7.5YR3/1オリーブ黒	平底から体部は内弯しながら立ち上がる	(外) 口縁～体部轆轤による撫で 体部最下位横・斜位の篦削り 底部篦撫で (内) 篦磨き　黒色処理
SB-02 2	坏 須恵	口径　12.2 器高　4.1 底径　8.2 ほぼ完存	胎；礫、白色砂粒、粗砂粒含む 焼；良好 色；(外)7.5YR5/4 にぶい褐 (内)7.5YR5/4 にぶい褐	外傾する高台から体部は外反気味に立ち上がる 轆轤成形　付高台	(外) 口縁～体部轆轤による撫で 底部回転糸切りの後篦撫で 高台部横位の撫で (内) 轆轤による撫で　酸化炎焼成
SB-03 1	甕 土師	口径(20.0) 残高　7.6 底径 口縁～胴部上位	胎；雲母、粗砂粒含む 焼；良好 色；(外)7.5YR6/3 にぶい褐 4/1褐灰 (内)7.5YR6/4にぶい橙	頸部は「コ」の字状に外反し口唇部を丸く納める 粘土帯積上	(外) 口縁～頸部横位の撫で 脚部横位の撫で (内) 横位の撫で 2と同一個体と思われる
SB-03 2	甕 土師	口径 残高 21.2 底径 底部～胴部一部	胎；雲母、粗砂粒含む 焼；良好 色；(外)7.5YR5/3,6/3 にぶい褐 (内)7.5YR5/3 にぶい褐 5/2灰褐	底部は不安定な 粘土帯積上	(外) 胴部斜位の篦削り　底部篦切 (内) 篦撫で 1と同一個体と思われる
SB-03 3	甕 土師	口径(13.8) 残高 8.1 底径 口縁～胴部一部	胎；雲母、礫、粗砂粒含む 焼；良好 色；(外)7.5YR5/4 にぶい褐 (内)7.5YR5/4 にぶい褐	最大径を胴部に有し、頸部は大きく外反する	(外) 轆轤による撫で (内) 轆轤による撫で 4と同一個体か
SB-03 4	甕 土師	口径 残高　1.8 底径 (7.4) 底部3/4	胎；雲母、粗砂粒含む 焼；良好 色；(外)5YR6/4 にぶい橙 4/6赤褐 (内)5YR4/6 赤褐 6/2灰褐		(外) 胴部横位の撫で 底部回転糸切の後篦調整 (内) 轆轤による撫で 3と同一個体か
SB-03 5	甕 土師	口径 (8.0) 残高 (8.0) 底径　4.8 底部～頸部1/2	胎；雲母、礫、粗砂粒含む 焼；良好 色；(外)7.5YR5/3 にぶい褐 '(内)7.5YR6/3 にぶい褐 4/1褐灰	僅かに上げ底気味の底部から脚部は球状を呈して短く僅かに外反する口縁部に至る	(外) 撫で　底部回転糸切 (内) 撫で 口縁部は剥離している部分も多く図以上に立ち上がる可能性もある
SB-04 1	坏 土師	口径(15.5) 器高　5.6 底径　5.3 口縁1/3～底部完	胎；粗砂粒含む 焼；良好 色；(外)2.5YR6/6 橙 (内)10YR2/1黒	小振りの平底から体部は内弯して立ち上がる 粘土紐まきあげ	(外) 口縁～体部横位の撫で　体部最下位横位の篦削り　底部篦切 (内) 横・斜位の精緻な篦磨き 黒色処理
SB-04 2	甕 土師	口径(19.7) 残高 12.5 底径 口縁～胴部上部	胎；粗砂粒含む 焼；良好 色；(外)5YR6/4 にぶい橙 (内)5YR5/4 にぶい赤褐	最大径を胴部に有し、頸部は「く」の字状に外反する 粘土帯積み上げ	(外) 口縁～頸部横位の撫で 胴部横・斜位の篦削り (内) 横位の撫で
SB-04 3	甕 土師	口径 14.7 残高 14.4 底径 口縁～胴部中位	胎；粗砂粒含む 焼；良好 色；(外)5YR5/4 にぶい赤褐 (内)7.5YR6/4 にぶい橙	最大径を胴部中位に有し、頸部は緩く外反する 粘土帯積み上げ	(外) 口縁～頸部横位の撫で 胴部斜位の篦削り (内) 撫で
SB-05 1	坏 須恵	口径(14.0) 残高　4.7 底径 口縁部1/4	胎；礫、粗砂粒含む 焼；良好 色；(外)7.5YR6/1 灰 1/4灰 (内)7.5YR6/1 灰	体部は内弯し口縁部で外反する	(外) 轆轤による撫で (内) 轆轤による撫で
SK-01 1	坏 土師	口径　9.4 器高　1.8 底径　5.6 完存	胎；雲母、礫、粗砂粒含む 焼；良好 色；(外)7.5YR7/6 橙 (内)7.5YR7/6 橙	平底から体部は大きく外反して開く 轆轤成形	(外) 底部回転糸切 体部轆轤による撫で (内) 轆轤による撫で
P-18 1	深鉢 縄文	口径 残高 底径 一部	胎；雲母、礫、粗砂粒含む 焼；良好 色；(外)7.5YR4/6 褐 (内)7.5YR4/6 褐		(外) LR縄文を施した後、沈線により区画を作る (内) 撫で
P-23 1	甕 土師	口径(23.0) 残高　4.8 底径 口縁部1/6	胎；雲母、粗砂粒含む 焼；良好 色；(外)5YR5/6 明赤褐 (内)5YR5/6 明赤褐	頸部は外反し、口唇部は短く内弯する	(外) 横位の撫で (内) 横位の撫で
遺構外 1	深鉢 縄文	口径 残高 底径 一部	胎；雲母、礫、粗砂粒含む 焼；良好 色；(外)7.5YR5/6 明褐 (内)7.5YR5/6 明褐		(外) LR縄文を施した後、浅い沈線で区画を設け、隆帯には細い刻み目を入れる (内) 撫で
遺構外 2	深鉢 縄文	口径 残高 底径 一部	胎；雲母、礫、粗砂粒含む 焼；良好 色；(外)7.5YR5/6 明褐 (内)7.5YR4/4 褐		(外) RL縄文を施した後、沈線で区画する (内)

第９表　出土遺物観察表

PL01 調査地全景真上写真

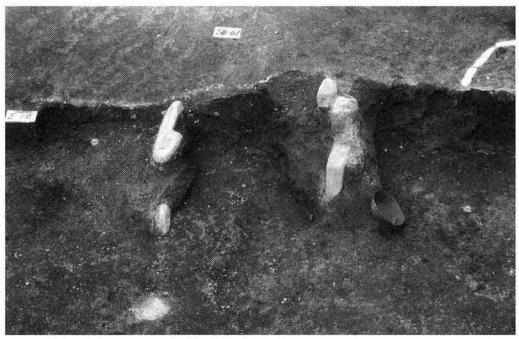
PL02 調査地全景写真（南から）

SB-01（南から）

SB-04（南から）

SB-02（南から）

SB-04 竈（南から）



SB-02 竈（南から）

SB-05（南から）

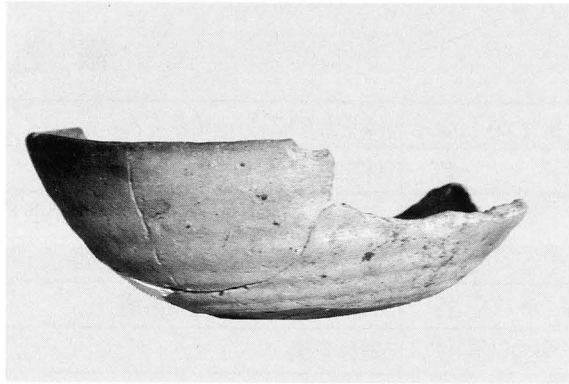
SB-03（南から）

ST-01（東から）

SB-03 竈（南から）

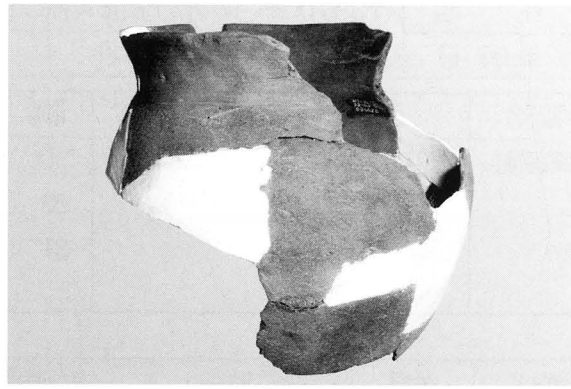
調査作業風景（西から）

SB-01 (1)



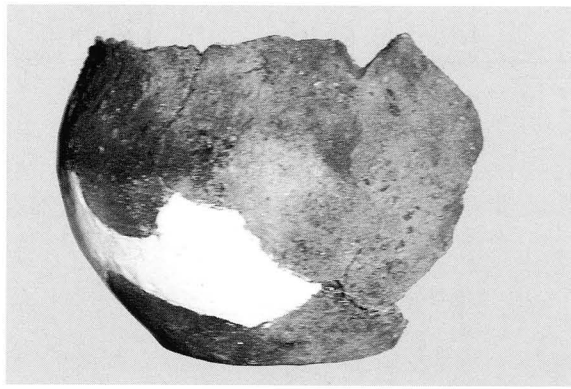
SB-04 (1)

SB-02 (1)

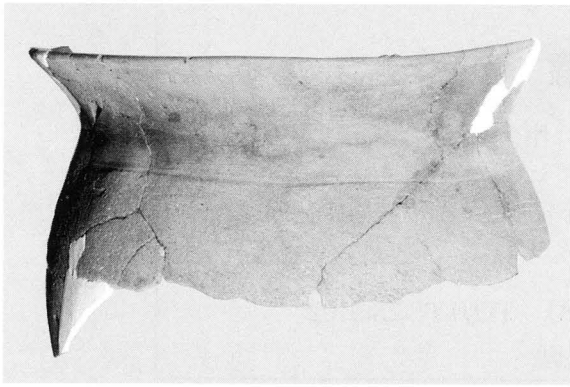


SB-04 (2)

SB-02 (2)



SB-04 (3)



SB-03 (1)

SK-01 (1)

報告書抄録

ふりがな	はやしのごういせきぐん
書名	林之郷遺跡群
副書名	主要地方道小諸上田線国補道路改良事業（上田市梅ヶ丘～町吉田間）に伴う 林之郷遺跡群発掘調査報告書
シリーズ名	上田市文化財調査報告書
シリーズ番号	第９７集
編著者名	中沢徳士
編集機関	上田市教育委員会
所在地	〒386-0025 長野県上田市天神二丁目４番74号 TEL0268(23)5102
発行年月日	西暦２００４年3月１９日

所収遺跡名	所在地	市町村コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
林之郷遺跡群	上田市大字蒼久保字中村５６２番地ほか	20203	36°23′21″	138°17′32″	平成 15 年 5 月 8 日～6 月 30 日	790㎡	主要地方道小諸上田線国補道路改良事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
林之郷遺跡群	集落	古墳時代後期～平安時代	竪穴住居址５ 掘立柱建物址１ ピット	土師器 須恵器	

上田市文化財調査報告書第９７集

林之郷遺跡群

主要地方道小諸上田線国補道路改良事業に伴う林之郷遺跡群発掘調査報告書

発行日　平成１６年3月１９日
発　行　上田市教育委員会
　　長野県上田市天神二丁目４番74号　TEL0268(23)5102
印　刷　株式会社　上田ワードプロセス企画